

イザヤ書21-22章「安逸を貪る国々」

1A 荒らす者の到来 21

1B 宴の中にいる者たち 1-10

2B 遠くにいる者たち 11-17

2A 主に目を向けない神の民 22

1B 奢った町 1-14

1C 逃げ去る指導者 1-7

2C 物に目を向ける民 8-14

2B 二人の側近 15-25

1C 自分のために生きる者 15-19

2C 忠実な僕 20-25

本文

イザヤ書 21 章から読みます。私たちはイスラエルの周囲の国々に対する神の宣告を読んできました。13,14 章にある、バビロンに対する預言から始まりました。再び預言はバビロンに戻り、いくつかの国々に対する裁きを宣言されます。21 章から 23 章までです。これまでとは打って変わり、不気味な雰囲気醸し出す形での預言です。そして幻が、今までより、さらに生々しくなっています。さながら映画の場面の中に入れられているかのようです。それを見せられている預言者イザヤの、心の苦悩も激しくなっています。そして、内容は、「この世の提供する富や安定に頼っている」人間の姿を描き出しています。今晚は、21-22 章だけを見ていきます。

1A 荒らす者の到来 21

1B 宴の中にいる者たち 1-10

¹ 海の荒野についての宣告。ネゲブに吹きまくるつむじ風のように、それは荒野から、恐ろしい地からやって来る。

「海の荒野」という、何か不気味さを感じさせる表現ですが、これはバビロンを指しています。海であれば荒野などないはずなのに、と思いますが、今であれば衛星写真で上空からバビロンを撮影すると理解できます。イラクの南部には、ユーフラテス川とティグリス川があり、その支流が数多く流れています。しかし、そこは川の周辺は緑地ですが、全体的には荒野です。同時に、霊的な姿も示しているでしょう。ダニエル書には、大海から大国を表す獣が出てきますが、その力ある姿としてバビロンがありました。しかし、最後はメディア・ペルシア連合軍によって倒されて、廃墟と化す厳しい裁きを示しています。

ネゲブはイスラエルの南にある沙漠地帯です。そこに吹くつむじ風は、熱風でたまったものではありません。風と言えば涼しくなるというイメージですが、私たち夫婦が夏にそこを訪れた時は、いいえ、とてつもなく熱くなって苦しかったです。

² 厳しい幻が私に示された。裏切る者は裏切り、荒らす者は荒らす。エラムよ、上れ。メディアよ、囲め。すべての嘆きを私は終わらせる。

イザヤに、厳しい幻が示されました。その幻を受け取る時に、自分の心身にもかなりの負担が課せられるような内容です。「エラム」と言っていますが、これはペルシア地方にある古来からある国の名前です。つまり、メディアとペルシアが連合してバビロンを包囲し、攻め込む幻をイザヤは、その場にいるかのように、生々しく見たのです。

そして、「私は嘆きを終わらせる」とは、主ご自身が終わらせるということでしょう。そして嘆いているのは、イスラエルの嘆きです。バビロンの中で、故郷に戻れないことを嘆いているのですが、それを主が終わらせます。

³ それゆえ、戦慄が私の腰に満ち、子を産む時のような苦しみが私をとらえる。私は心乱れて、聞くことができない。恐ろしさのあまり、見ることができない ⁴ 私の心は迷い、戦慄が私を襲った。私が恋い慕ったたそがれも、私をおびえさせるものとなった。⁵ 彼らは食卓を整え、座席を並べて、食べたり飲んだりしている。「立ち上がれ、首長たち。盾に油を塗れ。」

イザヤが見ているのは、ダニエル 5 章に書かれていることでありました。バビロンの最後の王、ベルシャツアルが宴会を催していました。千人もおり、ぶどう酒を飲んでいました。そして、エルサレムからネブカドネツアルが運んできた、神の宮の金や銀の器を使って、バビロンの神々に賛美を献げていたのです。そこに、壁に人の指が現れました。そして何か文字を書きました。ベルシャツアルは震えあがり、腰の関節が外れたと書いてあります。そこでダニエルが呼ばれました。彼は解き明かしましたが、それは彼の統治がそこで終わり、メディアとペルシアにバビロンが分けられるというものだったのです。そして、その夜にベルシャツアルは殺されます。

そしてこの幻を見た時のイザヤは、とてつもない恐れで身震いし、精神的にも落ち着かなくなりました。その裁きが、あまりにも生々しいからです。5 節に書かれているのは二つの場面です。ベルシャツアルたちが宴会をしている時に、町の外では戦いの備えをしているのです。

⁶ 主は私にこう言われた。「さあ、見張りを立たせ、見たことを告げさせよ。⁷ 戦車や二列に並んだ騎兵、ろばに乗る者や らくだに乗る者を見たなら、よく注意を払わせよ。」⁸ その人は、獅子のように叫んだ。「主よ。私は昼はいつも見張り場に立ち、夜ごとに自分の物見のやぐらについています。⁹

見てください。今、戦車や兵士、二列に並んだ騎兵が来ます。彼らは互いに言っています。『倒れた。バビロンは倒れた。その国の神々の、すべての刻んだ像も 地に打ち砕かれた』と。」

イザヤに対して主が、見張りを立たせるように命じました。それで獅子とありますが、見張りのことですが、立たせたら、ペルシア地方から来ているので、馬ではなく、らくだに乗ってくる連合軍が町の中に進軍してくるのを見ているのです。

そして物見のやぐらにいる人が、叫びました。バビロンが倒れる時に、彼らの神々の像も倒れたと叫びました。当時の戦争は、国と国が戦う時、その国を代表する神々との戦いであるとみなしていました。それで叫んでいます。終わりの日にも、主が再臨される前に大きな都バビロンが滅ぼされますが、黙示録 18 章にこの箇所が引用されています。「18:2 倒れた。大バビロンは倒れた。それは、悪霊の住みか、あらゆる汚れた霊の巣窟、あらゆる汚れた鳥の巣窟、あらゆる汚れた憎むべき獣の巣窟となった。」偶像礼拝に悪霊が多く住み着いていました。

偶像により頼む生活は滅びるということです。偶像とは、自分の願っていることをそのまま神とすることです。自分を中心に行っているのです。そして、主はそれを最後に滅ぼされます。

¹⁰ 踏みにじられた私の民、打ち場の私の子らよ。イスラエルの神、万軍の主から聞いたことを、私はあなたがたに告げたのだ。

イスラエルがバビロンによって、打ち場の麦のように打たれ、また踏みにじられていることに、慰めの言葉をかけておられます。この世という制度の中で、私たちが生きるのはとても辛いことです。キリストを拒む生活の中にいます。したがって、神を敬うユダヤ人がバビロンの中で味わっていた苦痛は、私たちも共有できるものです。踏みにじられ、打ち場で穂が打たれるように私たちも打たれている。しかし、世が過ぎ去る時が来るのだ、安息の中に入れるのだと励ましているのです。

2B 遠くにいる者たち 11-17

ところで、バビロン崩壊の出来事は紀元前 539 年に起こりました。今、イザヤが預言をしているのは、紀元前 700 年代のことです。約二百年後に起こることを預言していました。

11 節以降、話がもっと差し迫ったところに戻ります。バビロンが侵略してくるのはずっと後のこと、その前にアッシリアがイスラエルとユダ、そしてその周辺地域を攻め入ろうとしています。二つの国に対して預言をします。一つはエドムです。ヨルダンの南部、モアブの南にある国で、死海の南から紅海にまで広がっている国です。そしてエドムはアラビアに接しており、アラビアに対する預言を行なっています。

¹¹ドマについての宣告。セイルから私に叫ぶ者がある。「夜回りよ、今は夜の何時か。夜回りよ、今は夜の何時か。」¹²夜回りは言った。「朝は来る。また夜も来る。尋ねなければ尋ねよ。もう一度、来るがよい。」

ドマは「静か」という意味ですが、国はエドムです。「セイルから」とあります。今、エドムがイザヤに、「夜回りよ。今は夜の何時か。」と聞いています。一度聞いても返事がなかったので、もう一度、「夜回りよ。今は何の何時か。」と聞いています。そして、そっけない返事をイザヤがしています。

アッシリアが勢力を拡大しています。エドムはモアブの南にある国ですが、モアブが踏み荒らされたのですから、自分たちも踏み荒らされるのかどうか、尋ねています。これをエドムは「夜」と例えているのです。ユダの周辺諸国は、アッシリアの脅威に対して、活発な外交活動を展開させていました。それでエドムがユダにも使いを送って、聞いたのです。アッシリアの脅威が去るのはいつなのか、アッシリアから解放されて朝になるのはいつぐらいなのか、と。それに対するイザヤの答えは、「夜が明けても、また夜になるよ。」でした。今度はバビロンによる征服があるし、その後のあなた方の歩みも、暗闇だよ、ということです。

具体的に、紀元前 715 年にアッシリアの王サルゴンによって攻めてこられました。しかし、それからバビロンが来る時にはバビロンがユダを滅ぼしたので、ヘブロンの方に移住しました。そして、彼らは新約時代にはイドマヤ人と呼ばれます。ヘロデはイドマヤ人です。そして次第に歴史から姿を消します。

主の預言者は、主の心を代表しています。イザヤのそっけない返事は、主ご自身がエドム人に対して語るべき言葉が少ない、ということです。それはエドム人自身が、神に関する事柄について無関心だからです。先祖エサウが、一杯の食物と引き換えに長子の権利を売ったことを思い出してください。神のことを度外視していました。それで神もエサウに対しては何も語る事がおできになりませんでした。

イドマヤ人であるヘロデに対して、主は何かお語りになったでしょうか？ピラトがエルサレムに訪問中にヘロデのところへイエスを送った時、ヘロデはいろいろな質問をしましたが、イエスは完全に口を閉ざした状態でした(ルカ 23:9)。ヘロデの質問は真摯なものではなく、イエスが何か奇跡を行なう魔術師のように考えていたのです。

¹³ アラビアについての宣告。デダン人の隊商よ、アラビアの林に宿れ。¹⁴ テマの地の住民よ、渴いている者を迎えて水をやれ。逃れて来た者にパンを与えよ。¹⁵ 彼らは剣や抜き身の剣から、張られた弓や激しい戦いから 逃れて来たのだから。

アラビアは、今のサウジアラビアの地域に住んでいた人々です。イシュマエルの子孫であり、アラビア人です。この預言はエドムの時と同じく、715 年にアッシリアによって攻めてこられました。デダンの隊商らが今、逃げています。それでアラビアの林に隠れています。そして、テマの地の住民が、その避難してきた人々に食糧や水を与えています。

¹⁶ まことに、主は私にこう言われる。「雇い人の年季のように、もう一年でケダルのすべての栄光は尽きる。¹⁷ ケダル人の勇士たちで、残る射手は数少なくなる。」まことに、イスラエルの神、主が告げられる。

モアブの時のように時が決まっている。もう一年すれば必ず、勇士たちの数は減ると宣告しておられます。アラビアの地域の各部族たちは、互惠関係によって自分たちを守ろうとしたのだが、それは駄目になるということです。どんなにその社会の中では互いに助け合う制度がしっかりしているても、イスラエルの神、主に拠り頼まなければ減ってしまう、という警告の御告げなのです。

私たちは何を学ぶことができるでしょうか。エドムもまたアラビアも、アッシリアが攻めてくることについては、他のダマスコ、モアブ、ペリシテ、ユダよりも、危険度が少ない、地形的に遠くにあるところでは、彼らはアッシリアが他の国々に攻めてきたとしても、エドムの場合は自分のこととはあまり受けとめていない。そしてアラビアは、自分たちで助け合うことによって何とかやっていけると思っていました。

このようにして、主がアッシリアを通してわたしにより頼むことに気づきなさい、ということを行っているところに、自分たちと主との大きな距離を置いているのです。私たちにとっての敵は、「無関心」です。自分と神とはあまり関わりがないということです。また、自分を助けてくれる制度があるとそれにより頼んで、神により頼む必要性を感じません。

2A 主に目を向けない神の民 22

1B 奢った町 1-14

1C 逃げ去る指導者 1-7

¹ 幻の谷についての宣告。これは、いったいどうしたことか。みな屋根に上ったりして。² 喧噪に満ちた騒がしい町、おごった都よ。おまえのうちの殺された者たちは、剣で刺し殺されたのでもなく戦死したのでもない。³ おまえの首領たちは、こぞって逃げたが、弓を引かないうちに捕らえられた。おまえのうちの見つけられた者は、遠くへ逃げ去ったが、みな捕らえられた。

またもや、意味深で、少し不気味な言葉が出てきました。「幻の谷」です。これは読み進めれば分かりますが、エルサレムのことです。「谷」というのは、エルサレムは谷に囲まれている都だからです。東はケデロンの谷、西から南にヒノムの谷があります。そして、「幻」とは、数々の預言者が預

言を行なった町だということです。したがって、エルサレムは数々の神の御言葉が語られており、その幻によって立っているところになっているはずなのです。

ところが、ここにあるように「喧噪に満ちた騒がしい町、おごった都」となっていた、主に関わることは度外視していたということになります。イザヤ 19 章にもありました、ダマスコに対する宣告の中に北イスラエルの姿がありました。周辺の諸国と同じように、物質主義に陥り、世的になってしまっていることを示しています。

1 節に「みな屋根に上ったりして」とあります。これは、アッシリア軍が包囲しているのを屋上に上がって見ている姿です。そして 2-3 節を見ると、この危機に指導者が先頭に立って指揮しなければならないところ、アッシリアの情報を早く聞きつけていたので、自分たちのことだけ考えてなんとエルサレムを捨て、逃げていってしまったのです。ところが、アッシリアによって捕えられています。指導者が、我先に自分のことだけ考えて動いている姿です。

⁴ それゆえ、私は言う。「私から目をそらせ。私は激しく泣きたい。私の民、この娘の破滅のことで、無理に私を慰めるな。」

イザヤが嘆いています。バビロンが滅びる姿に戦慄を覚えていましたが、ここでは自分の民、自分の娘、神に選ばれ、召されているところの民がこのままだと滅んでしまうと叫んでいるのです。

⁵ なぜなら、恐慌と蹂躪と混乱の日が、万軍の【神】、主から来るからだ。幻の谷には、城壁の崩壊、山に向かっての叫び。⁶ エラムは矢筒を負い、戦車と兵士と騎兵を引き連れ、キルは盾の覆いを外した。⁷ おまえの最も美しい平地は戦車で満ち、騎兵は城門に立ち並んだ。

21 章のエラムはペルシアを指していましたが、ここでのエラムは当時そこを征服していたアッシリアのことです。彼らが軍隊をその谷に満たして、城門で立ち並んでいます。そして、それが万軍の主から来ているということがここに書いてあります。主が、ご自身に立ち返るためにお許しになった危機です。

2C 物に目を向ける民 8-14

⁸ こうして主はユダの覆いを除かれた。その日、おまえは森の宮殿の武器に目を向けた。⁹ おまえたちはダビデの町に破れが多いのを見て、下の池の水を集めた。¹⁰ また、エルサレムの家々を数え、その家々を取り壊して城壁を補強し、¹¹ 二重の城壁の間に貯水池を造って 古い池の水を引いた。しかし、おまえたちは これを造った方には目もくれず、遠い昔にこれを形造った方に目を留めなかった。

歴代誌第二 32 章に、ヒゼキヤ王がこれらのことを行なったことが書いてあります。「32:30 このヒゼキヤこそ、上方にあるギホンの水源をふさぎ、ダビデの町の西側に向かってまっすぐに流した人である。」今のエルサレムに行きますと、この記述の通りに発掘されています。ダビデの町という発掘現場に、ヒゼキヤの水道がありまして、今もギホンの泉から流れる道がそこを通っています。歩いて 30 分ぐらいかけると、シロアムの池に到達します。

ヒゼキヤがアッシリアに包囲されるまえに、これらのことを行ったことは全く問題ありません。けれども、問題は、民が、主に目を向けなかったことです。ギホンの泉を与えたもうた主に、目を向けなかったことです。いつになったら、それに気づくのか？と主の叫び声がここにはあります。

¹² その日、万軍の神、主は呼びかけられた。「泣いて悲しみ、頭を剃って粗布をまとえ。」¹³ しかし、なんとおまえたちは浮かれ楽しみ、牛を殺し、羊を屠り、肉を食べ、ぶどう酒を飲んで言っている。「飲めよ。食べよ。どうせ明日は死ぬのだ」と。¹⁴ 万軍の主は私の耳に宣告された。「この咎は、おまえたちが死ぬまで 決して赦されることはない。」万軍の神、主はそう言われた。

最後に、もうアッシリアによって殺されるということが分かった時に、主に対して叫んで嘆いて、自分の身を低くすればよいのに、そうではなく「今を楽しもう」となってしまいました。ちなみに、この箇所は、死者の復活を否定するコリントの教会の一部の人々にパウロが語っている時に、引用された言葉です。「I コリ 15:32b もし死者がよみがえらないのなら、「食べたり飲んだりしようではないか。どうせ、明日は死ぬのだから」ということになります。」

それで主は、最後通牒を出します。「この咎は、おまえたちが死ぬまで 決して赦されることはない。」罪を赦すその機会が失われた、ということです。これは恐ろしいことですが、救いの機会はいつまでも与えられているわけではありません。主が定められた時が来れば、滅びに至るのです。

2B 二人の側近 15-25

そして次に二人のヒゼキヤの側近が出てきます。一人はシェブナ、もう一人はエルヤキムです。ヒゼキヤ王の下で働いていた議官であり、アッシリアのラブ・シェケがエルサレムの住民に向かって脅しをかけていたとき、その言葉を聞いて、ヒゼキヤに報告した三人のうちの二人です。(36:22)

1C 自分のために生きる者 15-19

¹⁵ 万軍の神、主はこう言われる。「さあ、宮廷をつかさどる あの執事シェブナのところに行け。¹⁶ 『あなたは自分のために、ここに墓を掘った。ここはあなたに何の関わりがあるのか。ここはあなたのだれに関わりがあるのか。高いところに自分の墓を掘ったり、岩に自分の住まいを刻んだりして。

シェブナは、自分が死ぬための墓をしっかりと整えていました。当時の石棺にはいろいろな装飾を

することができ、また岩を掘ることで葬ようになっていました。つまり、この危機の時、エルサレム自体が滅びるという危機なのに、よりによって自分が安泰に死に、その後も名が残されるように葬られることしか考えていませんでした

¹⁷ ああ、勇者よ。主はあなたを遠くに投げやる。あなたをわしづかみにし、¹⁸ あなたをまりのように丸めて、広々とした地に投げ捨てる。そこであなたは死ぬ。そこであなたの誇る戦車も。あなたの主人の家の恥さらしよ。¹⁹ わたしがあなたをその立場から追放する。あなたは自分の地位から引き降ろされる。

主は彼を追放しました。自分から逃げて、エルサレムを出ていったのですが、アッシリアによって、ここにあるように殺されて、その死体は野ざらしにされました。イエス様が語られた、自分を救おうとして、そのいのちを失った例です。

2C 忠実な僕 20-25

²⁰ その日、わたしは わたしのしもべ、ヒルキヤの子エルヤキムを召し、²¹ 彼にあなたの長服を着せ、彼にあなたの飾り帯を締め、彼の手あなたの権威を委ねる。彼はエルサレムの住民とユダの家の父となる。

シェブナとは対照的なエルヤキムです。彼のような存在があったので、王ヒゼキヤはある意味、霊的に守っていたのかもしれませんが。「あなたの長服」「あなたの飾り帯」「あなたの権威」というのは、シェブナのことです。シェブナにあった高い地位が、エルヤキムに移ったことを意味します。主はこのような選り分けをしばしば行われます。持っていない者は、持っているものが取られ、持っている者に渡されます。タラントの譬えでも、一タラントを地の中に埋めた者は、十タラント持っている者に渡されました。(マタイ 25:28)

²² わたしはまた、彼の肩にダビデの家の鍵を置く。彼が開くと、閉じる者はなく、彼が閉じると、開く者はない。

エルサレムの町全体が世的になっていた中で、エルヤキムは主に忠実でいることができました。それゆえ、エルサレム全体が救われました。そこでエルヤキムにダビデの家の鍵が任されます。

彼の肩に鍵があるとありますが、王の最も位の高い側近は、王宮の大きな鍵が衣服の肩に置かれているようなものを身に付けます。これは、ダビデの家のことが一切任されている、大きな権威が与えられるということです。鍵を開ける、閉じるというのは、その家屋、また城市であれば、その町全体を守る要です。ですから、この全権が任せられていることの象徴なのです。

しかし、実はこの時点でエルヤキム本人に与えられたものから、キリストご自身の預言へと変わっています。「黙示 3:7 また、フィラデルフィアにある教会の御使いに書き送れ。『聖なる方、真実な方、ダビデの鍵を持っている方、彼が開くと、だれも閉じることがなく、彼が閉じると、だれも開くことがない。その方がこう言われる——。』黙示録の七つの教会、フィラデルフィアにある教会に現れたキリストが、ダビデの鍵が与えられている者、開くと閉じる者がなく、閉じると開く者がいないという権威が与えられています。

²³ わたしは彼を杭として、確かな場所に打ち込む。彼はその父の家にとって栄光の座となる。²⁴ 彼の上に、父の家のすべての栄光がかけられる。子も孫も、すべての小さい器も、鉢からすべての壺に至るまで。

「杭」というのは、家の中で容器を整理する時に、食器棚のようなものではありませんでした。壁に打ち付けた杭にかけていました。したがって、ここでは、この忠実な僕によって彼の家、つまりユダヤ人が全て支えられていたということになります。この方により頼んでいることによって、彼らに神に栄光が与えられるはずだったのです。

²⁵ その日——万軍の主のことば—— 確かな場所に打ち込まれた杭は抜き取られ、折られて落ち、その上にかかっていた荷も取り壊される。——主はそう語られた。』

これが、イエスが抜き取られた、つまり十字架に付けられたという預言です。イスラエルを救う方が断たれました。それゆえ、ユダの家全体が倒れてしまいました。ローマという勢力が彼らを支配していました。そして、ユダヤ人たちがローマに反乱を起こしました。そしてその戦いで、ローマはエルサレムを包囲して、神殿を滅ぼしてしまい、彼らが世界の離散の民となるのです。

イエス様を十字架につけた、ユダヤ人の宗教指導者たちは同じように自分たちの地位を脅かされていたので、殺したのです。世的になっていたのです。シェブナのように、自己保身に走っていたのです。けれども、そのためにローマに滅ぼされました。サドカイ派の祭司の家は、自分たちはローマと協力していたから安泰だと思っていたのですが、彼らこそが滅ぼされ、今は無き、ユダヤ教の一派となっています。

私たちの心に、自分の生活の安定を求めて、それゆえに神の動かそうとしておられることを拒んでいないか？このことを点検する必要があります。バビロンにしても、エドムやアラビアにしても、そしてエルサレム自身が、主に救いを求めることなしで、自分たちは安泰だと思っていた人々です。そして、キリストという杭に頼る必要があるのに、この方を退けると、全体が取り壊されるのだという警告です。